

# スウとさかさまおばけ

木原 美香子

## その1

スウは5年生の男の子です。本名は杉本数矢とい  
います。算数が苦手ですんざん苦労してきた（両親  
が**せめて子供だけは** 数字に強く、という願いをこ  
めてつけたような名前でしょ？）数矢の数をとって  
スウ、なんとも単純明快な呼び名ですが、本人もい  
たってノンキ、単純明快な男の子でした。

ところがそのスウに異変が起きました。それはク  
ラスにマキちゃんという転校生がやってきた日でし  
た。彼女は目がぱっちりした、ショートカットの元  
気そうな女の子でした。小麦色に日焼けして、はず  
むような足どりで歩きます。

スウは一目見たとき、心臓がドキンとしました。  
なぜって、スウは幼稚園のころからショートカット  
の活発な女の子に弱いのです。その女の子が席替え  
でとなりにきてしまったのだから、大変です。同じ  
班になればなにかと話すチャンスも多いからです。

まさにスウにとって、人生というステージでバラ色のカーテンが上がりかけた、そんな気持ちになった時です。机のなかから変なものが出てきました。それは透きとおっていて、フニャフニャで、キラキラと光っていて、目と口と鼻それに耳らしいとんがったものも付いていました。

「ゲーッ?!なんだこれは???'」

スウは授業中だという事も忘れて叫びました。黒板に小数点のついた計算の方法を書いていた、先生が振り向いて眼鏡ごしにジロリとスウをにらみました。

「杉本君、ゲーッとはなんです、これは小数点ですよ、夢でも見ていたんですか？」

「いーえ、ちがいます先生これ見てください。これこれ、、、」

スウは気味悪そうに机から体を離して、その変なものを指差しました。先生はスウのところまで来て机のなかを覗き込み、それから体を起こして「な

に？」と聞きました。

「先生ー、これですよ、これ」

スウは慌てています。『なんだよこれが見えないなんて、先生もう老眼なのかな？』

先生はフンと鼻をならして言いました。

「これってあなたの机でしょ、相変わらず汚くしていますねえ、いまに虫がわきますよ」

ワーッと笑いだしたクラスの皆に、先生は静かにするように言うと、黒板にもどってしまいました。

「さあ、杉本君もよく目をあけてこっちを見てちょうだい。ここは大切なところですからね。さて、、、」

スウはあっけにとられて先生の顔をポカンと見ていました。それからハッとしてとなりの転校生をみると、彼女はクスッと笑ってすまして前を向いてしまいました。恥ずかしくてカーッと化したスウが机の上を見ると、やっぱりあの変なものがこちらを見えています。スウがじっとにらみつけていると、そい

つは急にスウめがけて飛びついてきました。

「アーッ」思わず大声をあげたスウを、また先生がにらみつけました。そして怖いぐらいのやさしい声で言いました。

「廊下に出てしずか～に立ってなさい！そしてよく反省してわかったら戻ってらっしゃいな」

スウは廊下に出ましたが、反省するどころではありません。体のあちこちを探って、変な奴がいないか調べました。すると頭の上に何かついているような気がします。でもさわって見ても何もありません。

「へんだな～」スウは何度もごみをはらい落とすように髪の毛をパッパとふりはらいました。

しばらくすると先生が出てきて言いました。「反省しましたか？」スウはもちろん「はい」と答えるつもりでした。ところが、、、口をついてでたのはなんと正反対の「いーえ」だったのです。先生はび

っくりしましたが、もっとびっくりしたのはスウ本人でした。

『なんだって?! 僕はいーえなんて言うつもりなかったぞ』

「先生ご免なさい」と言おうとして、スウは自分の耳を疑いました。口が勝手に動いて「へ～んだ、先生のバーカ、アッカンベ～」と言ったのです。

みるみるうちに先生の顔は怒りで赤くなりました。そしてこめかみには青いスジが立ってきました。今にも噴火しそうな火山のようです。スウは思わず逃げ出しました。「杉本君、待ちなさいっ、コラッ!! まちなさい」先生の声が追いかけてきます。スウは慌てて止まろうとしましたが、足は勝手に加速します。ドタドタと廊下を駆け抜け、昇降口からグラウンドへ飛び出しました。

校庭をすごいスピードで突っ切り、裏門から飛び出すと公園を抜けて、裏山に登り始めました。先生はそんなスウを呆然として眺めていました。追いか

けようにももう若いとは言えない先生には、とても無理だったのです。『一体あの子はどうしたっていうのかしら、もう今の子供はほんとにわからないわ、体育の先生にお願いしてつかまえてもらわなくちゃ』先生はブツブツ言いながら職員室に入ってきました。

クラスではみんなが逃げていくスウを窓から乗出すようにして、やんやの喝采を送っています。

「ガンバレー！スウ」

「走れ、走れ、マキバオー！スウ」

「鬼ババから逃げきれよー」

どさくさにまぎれてこんな事をいう子もいます。

一方スウは走りながら、なにが何だかわかりませんでした。止まろうとしても止まれません。そのうちとうとう足が前にでなくなり、オイルのきれたエンジンのようにプツンと走るのをやめてしまいました。

ドサッと音をたてて草の上に倒れ込んだスウは、自分の足を不思議なものを見るような目で見ました。

「これは僕の足じゃない！！」

その時耳もとで、小さなチイチイという声が聞こえました。

「そうさ、君の足じゃない！！」

スウはびっくりしてとび起きました。そら耳でしょうか、でも周りにはネコの子一匹いません。

「君の足だけど、今は僕の足」チイチイ声と一緒にスウの肩のへんからあの変な奴がクネクネとはい出してきました。そしてスウの目の前にポーッと浮かびました。

「ワッ！また出た！！あっちへ行けよ、行けったら！！」

スウはあわててその変なものを払いおとそうとしました。でも手は空を切るばかりです。そいつはまたチイチイ声でいいました。

「そんな事やったって無理、ボクには実体がないのサ」チイチイ声でしゃべるそいつを、スウは口をパクパクさせて見つめていました。

ようやく声が出たスウはききました。

「だったらキミはオバケみたいなものか？」

「そう、そのオバケ。よく覚えてないけどズーッと前はボクも・・・」

「ボクも？」

「マッイイサ、今はオバケダゾー」

そう言うとそいつは口から舌を出して、ベロベロッとさせました。でもそれはちっとも怖くなくて、それどころかかえってかわいそうになるくらいの、小さな口と舌でした。

「ボク、オマエが気に入った。一緒にいるよ」

「冗談言うなよ、俺困るヨー」

スウは言いながらそっと後退りして、どうにかしてこの変な奴から逃げようと思いました。するとそれはチイチイ声で言いました。

「ダメダメ、ボクから逃げようとしても」そういつてそいつは又、ひょいとスウの頭の上にのりました。

『そうかこいつは人間にひょう衣できるのか、、、だったら今ここで騒いでも、どうにもならない』スウは覚悟を決めました。

さすが現代の子どもです一昔前の子どもだったら、自分はノイローゼにでもなったかと疑ったり、その場で気を失ってしまったでしょうがSFXとアニメーション、おまけに怪奇とSFに、小さいときから首までつかって育った世代です。テレビやマンガの中のできごとが自分に降りかかってきても、多少の驚きはあるものの、以外にすんなり受け入れてしまうのかも知れません。

そんな馬鹿なって？しかしそんな事を言うあなただって、今でも明るい未来を信じていますか？昔の子どもたちは鉄腕アトムを見て、明るい二十一世紀を思い描いていました。高層ビルの間を動く道路が

走り、空にはエア・カー飛び、ロボット犬やロボット警官が活躍する。そんな未来・・・でも今の子どもときたらノストラダムスの予言に詳しくったり、怪しげな密教の呪文をスラスラ言えたり、二十一世紀どころか二十世紀をのりこえられるかすら、怪しいと考えている子もいるじゃないですか、、、

それはさておきスウはこの変なヤツにくっつかれた以上、なんとかうまくやらないと自分の立場が危なくなることを悟りました。とにかく自分の意思とは反対に叫んだり、逃げ出したり、、、これでは他人が見たら、スウはどうかしてしまったと思うに決まっています。

そこでスウはこの変な奴と、協定を結ぶことにしました。もちろん相手がそれを吞んでくれればの話ですが、、、

「ヨシ、わかった。キミは僕と一緒にいたいんだね。でもキミが僕の出す条件を吞んでくれないと、

困ったことになる。僕がおかしくなったと思われて、病院につれていかれちゃう。そしたらくっついてる君だって、一緒にいかにくぢゃならないんだヨ」

病院ときくと、そいつはチイチイ声で悲しそうに言いました。

「ヤダヨ、ボク、ソコハキライ。ナンダカワカラナイケド、ヤナ気ガスル」

「じゃ、僕の言うことをきいてよ。まず、授業中や人前で僕が困るようなことはするなよ」

「ドンナ？」

「例えば先生にウルセーって言ったり、『ハイ』と言わずに舌を出したり、逃げ出したり、、、」

そこまで言ってスウは思い出しました。

『そうだ、僕学校から逃げ出してきたんだ。早く帰らなきゃ、、、先生になんて言ったらいいんだ』

スウは走りながらお化けに言いました。

「とにかく家に戻るまでは、静かにしててくれ。こ

れからのことは家でゆっくり話そう」

学校へ戻ると教室の前の廊下に、先生が心配そうに待っていました。教室の中ではクラスメイトたちが、これから起きることにハラハラ、ドキドキしながらかたずを飲んで、二人を見つめています。先生は腕を組み、片足をイライラしているように動かしていました。眼鏡の奥の目が、ギラリと光りつりあがっています。

「ウヘーッ、オニババのヤツ相当頭にきてるぞ。まいったナー」

「杉本サン」先生は「一体、あなたという人は何を考えているのですか。授業中に大声を出したかと思ったら逃げ出していくし、、、アーデモナイ、コーデモナイ、、、」

先生のお説教は延々と続きます。スウはうなだれて嵐が過ぎるのを待ちました。さすがに先生も息切れがしてきました。

「まったく、日頃からあれ程注意している事を、、、あなたは一体どういう気持ちで聞いているのですか？フーッもう結構です、今度から気をつけなさい。わかりましたね」

「ハイ、ごめんなさい気をつけます」スウは深々と頭を下げました。

「もう席へもどきなさい」

先生にいわれて教室には入ると気の毒そうな顔、面白がっているような顔、意地悪そうな顔、いろいろな顔がスウを迎えました。

さて終礼も無事に済みました。色々話しかけてくる仲間をうまくかわし、そうじもさっさと済ませるとスウは昇降口から飛び出していきました。そしていつもの10倍くらいのスピードでわき目もふらずに家へ帰ると、さっと自分のへやにとびこみました。

## その2

こうしてスウとおばけの生活が始まりました。とにかく気にいられてしまったのですから、仕方ありません。そのうち飽きて出ていってくれるのを待つことにしました。そう覚悟を決めては見たものの、慣れるまでは色々なことがありました。なにしろ条件をのんでくれたとは言うものの、おばけだけあって多少恨みがましいところがあるのでしょう。スウがもうイヤッと泣きたくなるようことが何度もあったのです。

オバケにとりつかれてから一週間程過ぎた頃でしょうか、スウは学校の帰り道となりの席の転校生マキちゃんに声をかけられました。

「スウ君」  
マキちゃんはちょっと恥ずかしそうにしてそれから早口で言いました。

「今度の日曜日わたしのお誕生会をするの。スウ君も来てくれる？」

『エッ君の誕生会？ボク行くよ、モチロン』スウはこう言いたかったんですよホントは。でもなぜかその時オバケのやつメツチャクチャ機嫌がわるかったらしい。スウの口をついて出たのは、まったく反対の『エーッおれやだよ、、、女ンチなんてカッコ悪くて行けるかい』だったのです。

マキちゃんは真っ赤になるとギョッと唇をかんでぐるりと後ろを向き走って行ってしまいました。そしてスウは見たのです。マキちゃんの目に涙がにじむのをでも、ほんとは泣きたかったのはスウの方だったのです。

「バカ、バカ、バカ、オバケのヤツなんて事いってくれたんだーッ」

泣きそうな声でスウがどなるとヒョイとオバケは顔を出してニヤリとしました。

「おまえばかりズルイモン」



「なにがズルイモンだ！ああ、僕の人生はおしまいだー」

スウは本当に人生は終わったと思いました。あの元気で明るくてキュートな、ちょっとあこがれていたマキちゃんとお友達になれるいいチャンスだったのに。オバケの奴許さーん！！

誰もいなかったらスウはクヤシ涙をながしながら帰ったかもしれません。でもこれは下校する生徒で溢れかえっているスクールゾーンです。うつむいてさっさと歩くスウの心の中に、嵐が吹き荒れているとは誰も気付きませんでした。

家につくといつものように母さんが、のんきそうに午後のお茶を楽しみながらパラパラと雑誌をめくっていました。

「おかえりなさいーい」

母さんの声が今のスウにはやけに明るく聞こえました。ブスツとして居間に入って行くと、母さんは母

親の頭についている見えないアンテナをクルリとスウに向けました。『なにかあったな！』母さんはさりげなく聞きました。

「どう学校、楽しかった？今日は何があったの」

「えーっ、いつもと同じさ」とスウ。

「その割には何か疲れてるみたいじゃない」と母。

「そんなこと、ねえヨ！！」

「ねえヨ？」と母。

「ないデス」とスウ。

しばらく駆け引きが続きました。

突然スウはひらめきました。結構うるさいけど人生における先輩がここにいるじゃないか、母さんだって生まれたときから大人じゃないって言ってるし、だいいち『もと女の子』だもんな、この際どうしたら良いか聞いてみよう。そこでスウはお母さんのそばにすりよって言いました。

「ネェ、お母さんちょっと聞きたいんだけど」

『きたぞ！！』と母さんは思いました。

「何よ、言ってみて」

今日マキちゃんに誕生会に呼ばれたんだけど、、、  
僕行かない。行きたくないって、つい言っちゃった  
んだ。どーしたら良い？」

「なになに、女の子の誕生会に誘われて、行きたく  
ないと返事したことで悩んでいるのか、まあ一番簡  
単なのはやっぱり行くって言えばいいんじゃない」

「そんな簡単じゃないの、怒ったみたいだったんだ  
よー」

「ふーん、スウはその子と仲直りしたいわけね、だ  
ったらプレゼント持って行ってみたら？」

「でも、もし怒ったらいれてくれないかも」

「くれないじゃなくて、くれないでしょ」

「はい、、、それに他の女の子がギャーギャーうる  
さいしー」

「フーンそうかじゃあ、ないしょでこっそり仲直り  
したいわけ、体面を保ったまま？」

「そ・そうだよ」

『母さんも、もと女の子だけあって、意地悪いよ  
なー』

「じゃあ良い知恵を授けましょう」母さんはどこか  
らか占師のように気取って言いました。

「今は五月だからお花屋さんに行ってスズランとか  
マーガレットとか、女の子の好きそうな花、バラは  
ダメヨ特に黄色か赤はネ、かわいい花をブーケにし  
てもらって、みんなが帰ったころ行けばいいのよ。  
ゴメンネって言って。キャンディやお人形とちがっ  
て花を断る子はいないわ、たぶんね」

『そーか、花か、それはいいかも』

「ところでお母様、それを買うにはちょっとおこづ  
かいが足りないんです」

「どのくらい？」

「うーん200円位しか持ってない、、、」

「しょーがないわね、ま、かわいい息子のためだ協  
力しましょう」

「やったー、ママ大ー好き」

お母さんはそーでしょ、そーでしょと言わんばかりにニコニコしています。

『さすが人生の先輩、女心は女に聞くのが一番！』

「ア～、ボクの赤いバラを君の髪にさしたら～、君はイタイヨ、イタイヨ～、髪ニカラマッタジャナイ～」

おかしい鼻歌が出るくらい、スウはすっかり元気になりました。

### その3

ところが世の中はそう簡単に物事が運ぶとは限りません。あくる朝スーは頭が痛くて目を覚ましました。体もだるいし、お腹もなんとなく変な感じがします。いつもならオナカペコペコ状態だとびおきて、朝の7時からご飯も2膳もぺろりとたいらげるスウに食欲がないのです。

『これは変だゾ』スウは「お母さ～ん」と弱々しい声で呼びました。

「ナーニ、早く起きてヨ、お味噌汁さめますよー」

「お母さん、ちょっと来て」

「なーに、この忙しい時に」お母さんはブツブツ言いながら階段を上がってきました。

でもスウの顔を一目みると

「アラー、あなた風邪ひいたみたいヨ、顔は赤いし、目はトロンとしてる。ちょっと体温計持ってくるから横になってなさい」

お母さんは久しぶりの、スウの発熱にとまどったような顔をして体温計や氷枕を持ってきました。

「やっぱり八度五分もあるわ、今日は学校は無理ネ、あとで神田川先生のところへ連れてってあげるから、しずかに寝てるのよ」

お母さんが出て行くのと同時にオバケがモゾモゾとスウの頭の上から顔を出しました。「オイ、スウ、ドウシタンダ、カンダガワセンセイッテ、ダレダ」

「エッ、アー俺、風邪をひいたらしい、神田川先生ってのは、、、」

そこまで言ってスウははっとしました。最初にこのオバケと会った日、病院をすごく嫌がっていたことを思い出したからです。病院に行くなんて言ったら、また家に逃げ出しかねません。

「エート、神田川先生てのはお母さんの知り合いでエート」

スウは説明に困ってしまいました。確かに先生は家

族全員を診てくれるるのですから、お母さんを知っています。だからウソはついていない訳です。でもその先は何といたら良いのでしょうか。スウは苦し紛れにこう言ってしまいました。

「近所のおじさん！いつも白い服を着てるんだ」

「ナンダソレ」

オバケは何だかわからないといった顔をしましたが、スウが目を閉じて寝たふりをしたので又ゴソゴソと髪の中にもぐりこんでしまいました。

9時になって病院があくとお母さんは先に診察券を出しに行きました。スウは着替えてボンヤリと居間でテレビをながめていました。熱でボーッとしているためか、いつもと違うところにいるみたいです。もっとも病気で休んだ時ってなんだか妙に時間がゆっくりと流れていくような気がしません？特にそれが5月のポカポカ晴れた日だったら、、、。

静かな家の中冷蔵庫のモーターが時々ブーンとう

なりをあげています。洗面所では水道からポタリ、ポタリと水が落ちています。

『母さんったらギョッとしめないんだからなあ』

バイクの通りすぎる音、隣のおばさんの声、幼稚園バスを待つおチビさんたちの笑い声。

「グズグズ言ってるのは、お向かいのユウ君だー」

自分には関係のない音ばかりなのが、取り残されたような気がしてちょっと淋しいような気もします。でもスウはなぜか日常の決まったりズムから、ポンと一人放り出されたようなやすらぎも感じていました。

そうこうするうちに、ガチャッと門があき続いてパタパタと階段を駆け上がる靴音がしました。玄関のドアが開いてお母さんの声がしました。

「さあ、お母さんにつかまって、しっかりつかまってフラフラするでしょ、足元気をつけてよ」

ありがたいことに神田川先生のところは道を隔てて50mほど歩いたところにあるのです。スウはヨロヨ

口歩き始めました。

神田川医院の待合室のイスにどっかりと身を沈めるとスウは目を閉じました。待合室は粉薬やら、消毒液やら色々混ざったにおいがします。パタパタと忙しそうなスリッパの音は、ちっちゃな子供がたてているのです。看護婦さんの患者さんを呼ぶ声、おばあさんたちの挨拶を交す声。病院の中はざわざわとしてました。「それにしてもおばあさんたちは元気そうだな、僕なんか70歳になったらもう、疲れて家でファミコンでもしてゴロゴロしてるだろうな、なんたって今度の担任は宿題は出すわ、嫌味は言うわ、五年になれば友達関係にも気を使わなきゃならないし、小学生だからってママの時代みたいにノンキにしてられないんだよナー。オレ達の時代はイジメなんかもあるし結構疲れるんだゾ。クラスでうまくやるテクニクなんて誰も教えてくれないし。そこのおばあちゃんスッゲー元気そうだけどどこが悪

いのかな、ナニナニ『今日は具合が悪いからマツさんは来てないって』なんだこりゃ？病院って具合が悪い時に来るところじゃないのか、、、それにしてもおじいさん達は静かだなあ、みんなだまってテレビを見てるかボンヤリしてる。『やっぱり年とっても女はツェーンダヨナー』スウはポーッとしながらも変なところに感心していました。

やがてスウの番になりドアをあけて診察室に入りました。スウはその時熱でポーッとしながらもいやな予感がしました。椅子に腰掛けて先生がスウを診始めるとオバケがヒョイと顔を出し、ボンヤリあたりを見回していましたが、そこが病院だとわかると急いで首を引っ込めました。するとどうでしょう、スウはじっとしていようとするのにスウの体は先生の前で椅子をグルグル回したり、口をあかなかったり、おまけにドアを開けて外に出ようとするのです。これには先生もお母さんもびっくりしました。

いつもきちんとできるスウなのですから。

お母さんはオロオロしながら「スウどうしたの、先生あんまり熱が高くておかしくなっちゃったんでしょか、42度以上でると脳があぶないんでしょ？」などと言っています。先生は驚きながらもそこはベテランドクター、落ち着きを取り戻して言いました。

「マァマァお母さん慌てないで、きっと注射でもされると思って怖くなったんでしょ。今の子はあまり注射に馴れてないからネエ」

スウは足をバタバタさせながら思いました。『見損なうなヨ、注射ぐらいでこのスウ様が逃げだすかってんだ。もう5年生だぞ1年生のチビとは違うさ原因はオバケなんだよー』

オバケはしばらくもがいていましたが、さすがに寄生主のスウが熱がグッタリしているのもうように動かさないのかあきらめて静かになりました。でもそのかわりヒョイと目の前に出てきて「ナンダ

イ、ウソツキ。ここは病院じゃないか。病院には行かないって言ったのに」とうらめしそうにスウを見つめます。スウは思わず「ゴメンヨでもオレ、風邪ひいたって言っただろ、しかたないんだよ熱があるんだから」と口にしてしまいました。

先生とお母さんはスウが何も無いところに向かって話しをしているのを見て、これはひょっとすると本当に熱でやられたのかも知れないと思いました。お母さんはもう泣きそうな顔になって「先生お願いです。もし何かあったらどうしましょう。入院とかしなくて大丈夫なんですか？」と言い出しました。

先生も少し自信がなくなって、「万一のことを考えて入院させたほうが良いかもしれませぬよね、まあ大抵は大丈夫ですよ子供は熱に浮かされますから」一方ではお母さんをなだめながら、スウの顔をじっと観察しています。

スウははっとして「先生僕大丈夫です。今ちょっ

と独り言を言っただけなんだ」ととりつくろいました。心配そうなお母さんをなんとか説得して、スウは注射を我慢する代わりに家に帰らせてもらえる事になりました。熱さましやら、粉薬やら、つぶの薬やら色々飲まなくてはなりません。

スウが自分の部屋に戻れたのはもう11時をまわっていました。熱があるのによけいな騒ぎですっかり疲れ果てたスウは、布団の中でボンヤリと考えていました。

『こいつをなんとかしないとこれからますます大変な事になるぞ。なんとか離れてくれないかなー、そうだまずあいつの正体を調べなきゃ。あいつはオバケって言ってたけどどんなオバケなんだろう？妖怪か、それとも幽霊か？幽霊だとすると前世はなんだったのかな、まさかイモムシってわけでもないだろうし、、、』

そんなことをとりとめもなく思っているうちに、いつしかスウは薬が効いてスースーと寝息をたてて

いました。

その頃当のオバケはパニックを起こしそうになっていました。

「ビョーイン、ヤダヤダ。スーどうして熱なんか出した、どうして病気になる。病院はいやだ」そのうちオバケはぼんやりと前にもこんなことがあったような気がしてきました。でもその時は自分はオバケではなくて、布団のなかで熱を出している子供だったような気がします。

『そういえば前にスウと話しているときも、何か思いだしかけた。あれはなんだったんだろう』オバケは窓から差し込む日の光や、風に揺れる木の葉や、通りを走る子供達の歓声を好きだと思いました。

『ボク学校も好きだ、どうしてだろう？ボクも前には学校に行ってたのかな、なんかなつかしい、なつかしいところ。ボクは前は人間の子だったんだ！だったらどうしてオバケになんかなったんだ？人は死



ぬと天国か地獄へ行行って聞いたことあるぞ、でもここはどっちでもない。ボクはどうしてこんなとこにいるんだろう、、、』

オバケは考えて、考えて、考えて、考えました。そしてボンヤリとひとつの風景を思い出したので。一本の大きな木そして風に揺れるコスモス、やさしく差し出された白い手、そして心配そうに覗き込んでいる誰かの顔、、、。『誰だあれは、どこだあそこは、あー思い出せそうで思い出せない、、、』オバケはとうとうあきらめました。

スウは夢を見ていました。夢の中で一本の道を歩いていました。良く知っている道らしくスウの足取りは目的をもったもののようでした。急にひなびた駅前に出ました。目の前に広がる空き地には秋の花が風に揺れています。幅が3メートル程の川に小さな石の橋がかかっています。その先には小さな店が何軒か並んでいますが、不思議なことに人っ子ひとり

いません。スウは急に淋しくなりました。

『みんな僕を置いてどこかへ引っ越しちゃったんだ。どうしよう、お母サーン』

スウは泣きだしました。走ろうと思っても、足が思うように前に進まず、もどかしくてスウは泳ぐように手で空気をかきわけながら歩き出しました。ところが足からはどんどん力が抜けていきます。そしてとうとうその場に座り込んでしまいました。

はっと気がつくときスウは自分の部屋のベッドの中にいました。『アア夢だったのかあ』なみだが目からあふれていました。本当にあんな悲しみは今まで経験したことがありません。

何とも言えない喪失感がスウをつつんでいました。それにあの風景、一度も見たことがないのに何故か良く知っているような気がしました。

その頃オバケも同じ夢をみていました。スウの見た景色はオバケの住んでいた町だったのです。熱の

ためにオバケの夢がひょいとスウの頭に、まるで映画のように投影されたというのです。オバケも泣きながら目を醒ましました。「オ・カ・ア・サ・ン」オバケの口から小さな悲しいつぶやきがもれました。

「エーン、エーン」

スウはオバケの泣き声に気がつきました。その声は夢のなかから響いてくるようで、スウの心を激しくゆさぶりました。

「オイ、オバケどうしたんだよ」

「お母さんも、お父さんもみんな僕をおいて行っちゃったエーン、エーン」

「オイ、オバケおまえ何か思いだしたのか」スウは勢い込んで聞きました。オバケは涙声で答えました。

「さっき夢を見た、ずっと前僕が子供だった頃住んでいた町の夢。ボクはひとりぼっちで歩いていた、うちの人を探してたんだでも誰もいなかった。ボク

は間に合わなかった、みんな先に行っちゃったんだ僕を置いてアーン、アーン」

オバケはしゃくりあげながらスウに説明しました。スウはそれを聞くと風邪をひいているのもわずれて、ベッドのうえにガバツと起き上がりました。頭がグラグラとしましたが、そんなことはかまっていられません。

「オイその町ってもしかすると小さな駅があって、空き地にコスモスかなんかがさいていた？そばの小さな川に石の橋がかかってたか？」

スウが勢い込んで聞くとオバケもびっくりして泣きやみました。

「うんそこだ、ボクの住んでたところは」

「スゲー、オレ今夢でそこを見たぞ、こんなことってあるのか？そこはどこなんだ、もっと思い出せないの」

「うん、ボク今まで何も覚えていなかった。でもスウといたら、だんだんぼんやりと何かわかってき

て、急に夢をみたんだ。そして思いだした」

「そうかそこがどこかわかったらなー、もしかしたらおまえお母ーさんやお父ーさんに会えるかもしれないのになー」

スウは残念でした、変な奴とっていましたがなんとなく憎めない奴でした。一緒にいてもそれほど嫌でなくなっていたのでした。病院で騒いだりしなければ、無理に引き離すこともないくらいスウはオバケの存在に慣れかかっていた。そのオバケがこんなに悲しそうにしているのを見て、やさしいスウは心のそこから同情したのです。

『あーあ、もっと思い出す方法はないかな』スウもオバケも今は同じことをかんがえていました。

## その4

七月になり、梅雨の合間の日差しはもう夏といっ  
ていいほど強くなってきました。体育の時間が何度  
かプールになり、子供達にとっては楽しい時間が過  
ぎていきました。もっともプール開きの日は大変で  
した。オバケは泳ぎが得意でなかったらしく、水を見  
るとプールサイドにしがみつき離れようとしませ  
ん。もちろんみんなの目にはスウがしがみついでい  
るように見えるのですから、泳ぎの得意なスウにと  
ってはちょっとした屈辱ものでした。

体育の先生がスウを泳がせようとする、まるで  
お風呂に連れてこられた猫のように、手足をつっぱ  
るわ、しがみつくわ、逃げようとするわ、、、最後  
には先生も日陰で少し休みなさいと言ってあきらめ  
てしまった程です。

水からはなれるとスウは怒りと恥ずかしさで顔を  
トマトのように赤くしてオバケに言いました。「お

い、何て事をするんだ俺はクラスで一、二を争うほ  
ど泳ぎは得意種目なんだぞ。見てみろみんなだって  
気持ちよさそうに泳いでいるじゃないか」

スウは口にしませんでしたが、マキちゃんのあの  
目、不思議なものを見るように見つめていたかと思  
うと、クスッと笑って行ってしまったのです。せっ  
かく仲直りして最近はず隣の席の利点をいかして、か  
なりいい線だったのに。スウは目の前が真っ暗に  
なりました。でもそれは急に黒くもが太陽をさえ  
ぎったせいでした。突然の強い雨に子供達はキャア  
キャア言いながら更衣室にかけ込みました。

雨のおかげでプールは早く終わりました。でも教  
室へ戻ってもスウは憂鬱でした。『あー、僕は一生  
こんな奴と一緒にいなくちゃならないのか。一体こ  
いつはどんな奴だったんだ、水は怖がるわ、医者は  
嫌がるわ、ひょっとしたら前世は人間の子じゃなく  
て、猫の子だったんじゃないか。病弱でしょっちゅ  
う注射をうたれてたとか、ドジな奴で足を滑らせて

下水に落ちてニャアニャア泣いてる奴だったとか』

スウは腹立たしさも手伝って勝手に想像をふくらませていきました。するとびしょ濡れの子猫が風邪をひいてミィミィ鳴いている姿が目に見えなくて少し哀れになってきました。でもそんなことでは今日の失敗の恥ずかしさは消えません。スウは家に帰るとまたコンコンとオバケにいい聞かせました。

「オレは泳ぎが得意なんだし万が一溺れたところで死ぬのはオレだぞ、おまえはもう死んでるんだからな」

するとオバケはなるほどとばかり、納得したのでした。あまり呆気なくわかってくれたので拍子抜けするほどでした。

すったもんだの挙句でしたが、一学期も何とか終わり夏休みが来ました。宿題はあるものの一ヵ月以上休みが続くということは、ほとんど先を考えない子供にとっては、永遠に近いものがあります。スウ

も八月の最終日の苦勞を毎年味わっているはずなのですが、今年は今年、新しい夏休みが来るとすっかり忘れて

「めいっばいあそぶぞー、プールは毎日行くぞー。そうだ花火もやるんだ。それから今年はお父さんどこへ連れてってくれるかなー」  
とはしゃぎまわるのでした。

こんなスウでも一つだけ頭のすみに引っかかっているものがありました。そう、「夏休みの自由課題」です。五年生ともなれば皆かなりリキを入れてきますから、決してあなどれない自由課題なのです。低学年の頃は皆工作とか絵でお茶を濁してきましたが、高学年になるとそろそろ得意分野が出てきて、絵を描く子、旅行記を書く子、昆虫採集をして立派な標本を作る子、毎日の天気図を記録する子、都会に出没する野性動物の生態を調べる子などと色々です。

スウは考えこんでしまいました。するとひょいと

良い事を思いつきました。ない知恵でもしぼってみるものです。

『手っ取り早く昔の暮らしをおばあちゃんに聞こうと。確か四年位のときにやったよな、昔の道具とか。だったら少し変えておばあちゃんの時代のことを聞いて、今の暮らしと比べて見るか。よし決まりだ、おばあちゃん家に行かせてもらおう。一週間くらい母さんの小言から離れるのも良いだろうし、おばあちゃん家は広くて涼しいし、昼寝もゆっくりできるかも。夏の縁側でスイカを食べたり花火するのもたまには良いよな』

そうと決まったら行動力は人一倍のスウです。さっそく母さんを説き伏せ一路おばあちゃんの家に向かいます。スウの家は横浜にあるのですが、おばあちゃんの家は隣の東京です。東京といっても山の手と下町の間、適当に人際き合いもあり、適当に遊ぶ場所も残っているというところでした。それに有名ではありませんがちゃんと八幡神社もあってお祭

りもあれば夜店もでるのです。なんだかパツとしないですって、いえいえ人間にはこの適当つまり「イイカゲン」ではなく「良い加減」というのが大事なのです。

荷物のつまったナップザックとオバケを背中にしょって、スウはおばあちゃんの家に着きました。

母方のおばあちゃんは、おばあちゃんといってもまだ若く、スウを猫っかわいがりするような事はありませんでした。だからかえってスウも甘えられるのです。男の子はベタベタされるのが嫌ですから、あれやこれやと世話を焼かれるより、必要なときに必要なことをしてくれるおばあちゃんが好きなのです。

なにしろおばあちゃんは子育て経験者ですから、今まさに子供と格闘しつつ育てているお母さんより、ずーっと余裕があります。子供の気持ちも距離を置くので良くわかるらしいのです。だからスウは

気楽でした。それに食事だって楽しみのひとつでした。いつもは食べられない煮魚だとか、ひじきだとかを作ってくれるのです。忙しいとワンパターンのスパゲティーやらカレーやら、ギョウザ、シュウマイ、鳥のカラアゲが交代で出てくるお母さんの料理よりなんだか深みがあって、スーは好きでした。

お母さんったら合成添加物ていうと目の敵にするくせに疲れてくると、結構手抜きをして冷凍食品を使ったり外食に走るんだからなあ、言ってる事とやってる事が違うヨ。まだまだ一人前とは言えないな。コーラはダメって言いながらケーキとかは買ってきて勧めるし、イラナイって言うとき「せっかく買ってきたのにー」なんて恩着せがましく言うんだ。誰も頼んだ覚えはありませんヨーダ。たまには僕の好きなおやつを買ってきてくれてんだ。

スウはこんな事を考えていました。「あーあ、俺って結構ストレスたまってるなー。五年生でこんなじゃ先が思いやられるぜ、さーストレス解消に遊ん

でくるか」

## その5

スウはとなりの幼馴染みの家を覗いて見ることにしました。いるかな、何か月ぶりだろう。となりの翔太君はおない年で、小さいときからおばあちゃんの家に来るとよく遊んでいたのが五年生になっても仲がいいのです。スウはいとこ位の親愛の情を翔太に感じていました。

「ごめんくださーい、杉本ですけど翔太君いますか？」

すると

「ヨー、あがれよ」

と言いながら翔太が出てきました。何か月かぶりで見ると翔太は背が伸びてずいぶん大きくなっていました。声も少し太くなって髭のあかちゃんのようなものもポヤポヤとしています。

『へー』スウは驚いて思わず「ずいぶん大きくなったね」と言いました。すると翔太は誇らしげにニヤ

りとすると

「親戚のオバチャンみたいなこと言うなよ、さあ、あがれよプレステ買ったんだ、やろうぜお前持っている？どこまで進んだそれから何日くらい泊まるんだ？」

とやつぎばやに質問してきます。スウはあわてて答えながら翔太の後ろから着いて行きました。

翔太の部屋は二階にあります。窓をあけると夏の涼しい風がさーっと入って来ました。東京とは言ってもまだまだ緑地が残っているのです。木々の間を通ってくる風には、夏の匂いがしました。

しばらくの間二人はゲームに熱中していましたが、それにも少し飽きてくるとゴロリと横になりました。「夏はいいよな」ぼつりと翔太が言いました。

「ああ」

「夏休みに宿題を出すなんて、誰が思いついたんだろうな」



「ああ」

「きっとそいつはスゲー暇な奴か、子供の不幸を喜ぶ奴だったんだろうな」

「ああ」

「『ああ』以外の言葉を忘れたのか」

「ああ？あー悪いわるい、俺ちょっと今悩みつつーか探しごとつつーか、ちょっとややこしいんだ」

「なんだなんだ悩みだって、あーお前にも一人前に悩みができるなんて、おじさんは嬉しいぞ」

そう言って翔太はククククっと泣くまねをしました。

「何言ってるんだよ、ほんとにマジなんだよこっちは、そうだお前手伝えよ、どうせひまなんだろ」

「どうせおれは暇人ですよ、お願いされればやってやらない事もない。なあーんちゃってね。その悩みって一体なんだよ」

そこでスウは今年の春オバケに取りつかれ、自分の意志とは逆さまの事をしゃべったり、わめいた

り、走り出したり、大変な思いをした事を話しました。翔太は目を丸くして口もポカンと開けてスウの話しを聞いていましたが、突然話しをさえぎって言いました。

「ちょっと待てよ、落ち着けよ、お前オバケに取りつかれてるって、マジで行ってるのか？」

「そうだよ、そいつはオレにしか見えないけどさ」

「それってちょっと、危なくないか？お前熱あるんじゃないの」

「違うよ、おいオバケどうしたらいい」スウが言うとオバケがひょいと姿を見せました。

「何だよスウ、さっきからゴチャゴチャ言ってオレの事知られてもいいのか」

「いいんだ、こいつはオレの昔からの友達で、小さいときはよく一緒に近所でいたずらやったもんだよ。口は固いし信用できるやつさ」

「お、おい、さっきから誰と話してたんだよ。スウお前ほんとにだいじょうぶか？まさか親に無理に勉強

させられてプツンしたんじゃないだろうな」

翔太はスウをいたわりと気味悪さのまじった、複雑な目つきで見つめました。

その時翔太の目の前にフイッと現われたものがありました。それは透き通っていてキラキラしていて、目と鼻と口が、、、いえこんな説明はとばします。サカサマオバケが姿を現わしたのです。でもよくTVでやるように、スーっと日が陰るとか不気味な効果音がするとかがまったくなく。夏の午後、風がカーテンを揺らしている、なんともあっけらかんとした部屋にヒョいとでたものですから翔太ははじめ気付きもしませんでした。

それどころか無意識に目の前の埃でもふりはらうように手を動かしましたのでオバケはひょいと動いて見せました。そこでやっと翔太はその存在に気付きしばらく目を丸くして見つめていました。

そこでオバケが気取って「ハーイ」と挨拶すると翔太の黒めがスーっとまぶたにかくれて、体はへな

へなと畳に崩れ落ちてしまいました。

「チェッ大きな割に意気地のない奴」とスウは始めてオバケと接近遭遇したとき自分もうろたえてギャーッと叫んだことなどすっかり忘れてつぶやきました。

「オイ、スウどうする？こいつオレのこと見て気絶したぞ」

「まあしょうがないサ、急に目の前に出てきた透明な物がハーイなんて挨拶すれば、たいていの奴は叫ぶか腰抜かすかするよナ、、、おい、おきろよ翔太、、、オキロー」

スーは翔太の頬を軽くつつきました。それでも翔太は気がつきません。

「翔太クーン、起きてヨー。朝だゾー、遅刻するゾー」言いながらスーは翔太の頬を今度は少し力を入れてパンパンとたたきました。すると翔太はうっすら目を開けしばらくボーッとしていましたが、オバケとスウが自分の顔をのぞきこんでいるのに気が

つくと、ウワーっとさけんで起きあがろうとしました。でも腰が抜けたらしく、立ち上がれません。

「オイ、翔太。気絶したり叫んだり腰抜かしたり、にぎやかなやつだな。しっかりしろよ、こいつがその、オレのダチのオバケさ」

スウは少し悪ぶってオバケを紹介しました。

翔太は口をポカンとあけたまま、目をパチクリさせていましたが、やっとオバケが本当にいるということがわかったらしく、こわごわ言いました。

「コ、コレ、カミツカナイ？それから急にすごーいやつに変身したりとか、そいでもってオレ達を食おうとするとかしない？」

「オイ翔太おまえマンガの読みすぎとちがう？これは大丈夫さ。そんな変な霊とかでなくて、たぶん普通の幽霊」

「フ、フツウったっておまえ、何を基準に言えるのさ」

「それはだなー、マ常識ってヤツ。それにオレこい

つと3ヶ月も暮らしてるんだぞ、少しはわかるようになるさ」

それでもまだ信じられないという顔で、おそろおそろ宙に浮いているさかさまオバケを眺めていた翔太でしたが、スウの話を聞くうちに、なんとか現実として受け入れる事にしました。なんと言っても目の前にポーッと浮かんでいるものをみせられては、納得しないわけにはいきませんものね。

## その6

まあ翔太とオバケの出会いはちょっともたつきましたが、2~3日もするともう竹馬の友のように三人でくっついて、朝から晩まで過ごすようになりました。なんたって夏休みです。時間はたっぷりあるし、未来は輝いていました。九月一日などという日は無限の彼方にあるように思えました。

こうして毎日大いに遊び、申し訳程度に勉強もしているうちに、三人はそろそろ退屈になってきました。

「オイ、スウ毎日同じ事やってもつまんないと思わないか」

「あー、オレ夏休みの自由研究のことでバアちゃんちにきたんだっけ、忘れてた。そろそろ昔のようすを聞いたりしなくちゃ」

「フーンそうか、おまえ夏休みの自由研究はそれが、オレもそうしようかな。おい、いっしょにやろうぜそうすれば分担してやって、努力半分ですむ

よ」

こういう時ばかりは算数の苦手な翔太とは思えないほど理論的に頭がはたらくのです。

「それともせっかくオバケに会えたんだから、オバケの観察日記にしようかな」

「オイ、オイ、冗談止せよそんな事したら先生に大目玉だぞ。昔の暮らしにしとけよ」

「そうだなー、そうと決まったら行動あるのみ。スウのオバアチャンちへ逃げ」

スウのおばあちゃんは突然なだれ込んできた二人にびっくりしましたが、夏休みの宿題ときいて昔のことを色々教えてくれました。

「そうだわ、もう使っていない二階の部屋に昔のアルバムがあるわよ、昔はおじいちゃんも写真を撮るのが好きでひまさえあれば、このあたりを撮っていたからすごい量だけど。あなたたちには面白い物がうつっていると思うわ」それを聞くと二人は二階へ直

行きました。もちろん二人+ ですが。

古い本やアルバムがおさめてある本棚がある部屋は、少し埃臭くて胸がキュンとするような、なつかしいにおいがしました。

「見るよこの女の人、むかいのおばあちゃんじゃないか？」

「ほんとだ、うちの叔父ちゃんも写ってる。へーいがり坊主で下駄まではいてるぞ」

「これって井戸か、道端に井戸なんて江戸時代だけかと思ってたよ」

スウと翔太はだんだん夢中になって、何百枚もある写真を見て言いました。

「へえー、みんなおかしな服着てるし、下駄はいてるヤツが多いゾ」

「アッ、コレ見るよ、タコあげてる」

「こんなにたくさんのタコ見たことないよ」

「コレは、、、坂の上のマンションのどこかな？ど

うみたって山だぜ、のどかな田舎みたいだ」

翔太はあこがれのこもったまなざしで写真を見つめました。

「この電気NHKのドラマに出てくるヤツ、ヒモでぶら下がってるヤツ、アヒョーこれもテーブルじゃなくてたためるお膳、、、エートなんてったっけ」

スウが家の中の写っている一枚を見つけて話しかけました。

「ちゃぶ台だよ、チャブダイ返して言うじゃんか、コレひっくり返りやすいよな、小さいもん。テーブルひっくりかえすんならリキいるけど、これなら昔の親父はやったかもナー」

「オイまずいよそれ、うちなんかそんな事したらまず離婚だなー」

「うちも母さんなんかすぐ実家へ帰るぜきっと」

「昔は男が強かったのかー」

変なところで感心のため息をついている二人でした。本当に昔の写真はタイムマシンのようで、見る

物見る物二人を興奮させたり、笑い転げさせたりしました。そのうちスウが一枚の写真を取りあげ、じっと見ていましたが「これって、このお嫁さん誰だ、何か見たことあるような、、、」

「ドラドラ」翔太は後ろからのぞき込んで、「オマエにわからんものがオレにわかるわけないかー」とおどけてみせました。

その時「アーッ」オバケがびっくりするような大声で叫びました。

「アーッ、アーッ、それ、それ、オレ、、、」

「な、な、何だよ、落ちつけ」

「それ、それ、知ってる、オレ知ってる。そのきれいな着物着て、真中にいる人、オレ知ってる」

「誰だよ？」二人は突然の展開に夢中です。

「エート、エート、知ってるけど誰だろ、すっごくなつかしい」オバケはそう言うとボロボロ涙をながしました。

「オレちょっと、おばあちゃんに聞いてくる」スー

はそう言うと写真を持って階段を駆け下りました。

「おばあちゃん、おばあちゃん」

「ハーイ、ここですよ。どうしたの？そんなにあわてて」台所からおばあちゃんがこたえました。

「ねえ、おばあちゃんこのお嫁さん誰？」

「えー、どれどれちょっとメガネを、、、エート、この人は何をかくそうおばあちゃんのお母さんよ、あなたのひいおばあちゃん。へーエこんな写真あったんだ、ここにいるのがおじいちゃんでもちろん隣にいるのは私のお父さん。ああ、なつかしい。おばちゃん達もおじいちゃんもおばあちゃんもみんないるわー」

おばあちゃんはそれはそれはなつかしように写真に見入っていました。

「フーン、そうかボクのヒイおばあちゃんか、それをなんでアイツが知ってんのかなー」

「エッ、なに？」

「いや、こっちの事です。サンキューおばあちゃ

ん」

スウはそうとうと二階へ戻っていきました。

「これってオレのヒイバアチャン。つまりオレのバアチャンのお母さんだって」

「なんでその人のこと知ってるんだ」

オバケは涙で濡れた目をあげ、また写真に見入りました。「オバアチャンのお母さん、、、お母さん、お母さんダ？」

「ソウだよ、そう言ってるだろ」

「ちがう、スウ、ちがう！ボクのお母さんだー」

「エーッ」スウはもう少しで腰を抜かしそうになりました。

「ヒイバアチャンがこいつの母さん？だとしたらオレのジイチャンか、こいつは？いや、待てよオレのジイチャンはまだ元気だぞ、落ちつけ落ちつくんだ」

スウの頭の中には知る限りの親戚のおじさん、おばさん、大おじさん、大おばさんの顔が次々に浮かび消えていきました。

『一体こいつは誰なんだー』その時翔太が突然写真

の箱をひっくり返して、何百枚もある写真を調べ始めました。

「おい、スウ答えはこの中だきっと」

「エッその中？」

「そうさ、ヒイオバアチャンがお母さんって事はお前んちのおばあちゃんの兄弟って事さ。おばあちゃんの小さい頃の写真をさがせ！」

「そーか、そーだ。それならオレおばあちゃんに聞いてくる」

スウは前よりもあわてて階段をすべりおりにして、台所へすっ飛んでいきました。息を切らせて顔を真っ赤にしているスウを見て、おばあちゃんは何事が起こったのかと「スウどうしたの、そんなにあわてて」とイスからたちあがりました。

「おばあちゃん、僕聞きたいことがあるんだ」

「どうしたの、落ちつきなさい。何を聞きたいの、おばあちゃんに」そう言いながらおばあちゃんは頭の中で、『二階のあの部屋はスウを驚かせるものなんて置いてないはず、アッもしかして、、、イエイ

「おじいちゃんからのラブレターはタンスのひきだしにちゃんとしまっているし、あれを読んだという可能性はないわね」などとめまぐるしく考えていました。

だからスウが「おばあちゃん、おばあちゃんには小さいとき死んじゃった兄弟いる？」と言ったときには、あまりのことにしばらく返事が出来ませんでした。

おばあちゃんの頭の中に50年以上も前の光景が、まざまざと甦ってきました。

『そう、忘れるものですか、小さい可愛い私の末の弟。もうすぐ学校に上がれるっていう年だったわ、今のスウよりずっと小さくて、あの戦争さえなければ今頃立派に成長して、たくさんのおともたちにかこまれていたでしょうに』

おばあちゃんの目はスウを乗り越えて、別の世界を見ていました。つらい戦争の日々、食べ物も少な

く、飢えていた子どもたち、着るものもなく寒さにふるえていた子どもたち。医者も薬も乏しいのであつけなく死んでいった小さな命達、、、。今では記憶の彼方に封じ込めていた光景が次々に浮かび上がってきました。

「おばあちゃん、おばあちゃん、どうしたの？」  
スウの呼ぶ声に我にかえったおばあちゃんは、めがねをとるとそっと目がしらをおさえました。スウは見てはいけないものを見たような気がしました。聞いてはいけないことを聞いてしまったと思いました。でもおばあちゃんは話してくれたのです。

「スウよく聞いてね、あれは第二次世界大戦。その頃は太平洋戦争とっていたけれど、日本がアメリカやヨーロッパを敵にまわして戦っていた戦争があったのよ。

おばあちゃんはその頃スウより少し大きいくらいで、都会にいとあぶないからといわれて学校のお



友だちと遠い田舎にいかされたの。学童疎開といって田舎に親戚のない子どもたちは先生につれられて、安全な遠いとおい田舎にお父さんやお母さんとわかれて行かされたのよ。でも小さい子どもたちはお母さんから離せないでしょ、私の一番末の弟も東京に残ったの。弟は体が弱かったから小さいときから入院のくり返して、おばあちゃん達もそれはそれは大切に思ってきたのよ。

それがもうすぐ一年生になるすぐ前の三月十日、東京は大空襲にあったの。敵の飛行機が爆弾を何千発も空から落として、東京は一晩で焼け野原になってしまった。火に追われて逃げる人々は容赦なく攻撃されたの。特に下町の被害はひどかったそうよ、黒こげになった屍が何千体何万体と横たわっていたそうよ。

おばあちゃんの家族も取るものもとりあえず逃げたの。火に追われ逃げまどう人々に小突かれながら、おばあちゃんのお母さんは上野の山目指して走

ったそうよ。もちろん小さな弟の手を引いたり、時には背負ったりして。

でも何万人もの人が右往左往する中で蹴飛ばされたり、小突かれたりして、気がついた時にはあんなにしっかり握りしめていたはずの坊やの手が、、、。

おばあちゃんのお母さんは、死にものぐるいで叫びまわったの。煙に焼かれて声が出なくなるまで。でもとうとう会うことは出来なかったの。誰か親切な人にでもと思って、長いこと待っていたのだけれど、、、本当にいつか帰ってくると思っていたのね。

私たち兄弟姉妹があきらめてからも、おばあちゃんのお母さんだけは決してあきらめていなかったわ。きっと死ぬまでもしかしたらと思っていたのかも知れない。それでなかったらあの火の中で一瞬といえども、子供の手を離した自分を許すことは出来なかったと思うの。

おばあちゃんの弟はリクというのよ、大陸のリク。強く大きくなれってあなたの曾おじいちゃんがつけたの」

話し終わると、おばあちゃんはにっこりして言いました。

「スウ、あんたたちはほんとに幸せなのよ、夏休みもあるし、テレビもマンガもファミコンも、おかしだっけ食事だっけ、無くなるかも知れないなんて思ったことないでしょ、まして火の中を逃げまどったり、お母さんと遠く離れて、クラスメイトと暮らすなんてねえー」おばあちゃんはホーツとため息をつきました。

スウはすっかり悲しくなりました。

「ありがと、おばあちゃん。ぼくそんなことがあったなんて、テレビやアニメでは知ってたけど僕のおばあちゃんにそんなことがあったなんて、、、」

「いいのよスウ、あなたたちはまだ小さいから。でも今の日本ができるまでにたくさんの事があって、

たくさんの悲しい思いをした人々がいて、そのつらさや悲しさが寂しさを乗り越えてきた人たちがいるって事、忘れちゃだめよ。

それに、またこんな思いをしないためにも、しっかりと目を開いていて。地球の人々は戦争している場合じゃないんだもの、ネッ」

## その7

気がつくと台所の入り口に翔太が静かに立っていました。二人で二階へもどると翔太のさがしだした、おばあちゃんの小さい頃、家族で撮った写真をじっと見つめているオバケの姿が目飛び込んできました。

「オネーチャンだ、大きいオネーチャン。  
小さいオネーチャン、オニイチャンもいる。  
みんないる、アーおぼえてる、、、  
コレがボクだ」

そこにはスーのひいおばあちゃんに抱かれた、3つ4つの男の子が写っていました。

「コレがボク、コレがお母さん、コレがお父さん、  
コレが大きいオネーチャン、、、」

オバケは一人ひとりを指さしていきました。

「そうか、おばあちゃんの弟だったんだ」あらためてスーは不思議な気持ちでオバケを見つめました。

「リクちゃん」そっと呼びかけるとオバケはビクツとして、ゆっくり振り返りました。

「そう、ボク、リクちゃんって言われてた。思い出した、ボクの名前リクだ。大陸のリクだってお父さんが教えてくれた。大きく強くなるんだぞってお父さん言ってた、、、。」

「ボクのおばあちゃんはこの人。と言ってスウが指さすとオバケは怪訝そうな顔でスーを見返しました。

「あのおばあちゃんが大きいオネーチャンなの？ボクのオネーチャンはオネーチャンで、おばあちゃんじゃないよ」

「リクちゃん」もう名前のわかったオバケに、スウはゆっくりと教えるように話し始めました。

「ボクのおばあちゃんは君の大きいオネーチャン。君は炎の中で迷子になってしまったらしい。あれから長い長い時間がたった。何年も何十年もたって、

オネーチャンはお母さんになって、ボクのお母さんが生まれ、そしてそのお母さんがボクを生んだ。リクのおネーチャンはおばあちゃんになったんだ」

オバケのリクはジーッと考え込むように聞いていましたが、ワカッタと言いました。それはスウの耳にはまるでうめき声のように聞こえたのです。

「ボク、おぼえてないけどその時、死ンジャッタノカナー。ボクの知ってる人もみんな死んじったのか、オネーチャンもおばあちゃんになっちゃったから、ボクのおネーチャンじゃないみたい。ボク、お母さんに会いたい、お父さんにもみんなに会いたい」

オバケは悲しそうに言うと、姿をふっと消しました。後に残された二人はどうしたらオバケのリクがお母さんに会えるか考えました。長いことアーでもない、コーでもないと言い合ったあげく。ふと翔太

が思い出したように叫びました。

「アッ、そーだ。お盆のオクリ火だ。オレの小さい頃よくやったよ。玄関の前に小さなワラのようなものを燃やして、たき火を作ってその上をまたいだ。ご先祖様をお迎えする火だからってオバアチャンが教えてくれた。そしてそばにキュウリで作った馬やナスで作った牛をおいたんだ」

「それオレも知ってるぞ、その馬や牛に乗って帰るんじゃなかったっけ」

「ウーン、よくわからないけどやってみようよ」

二人はおばあちゃんい聞いて、材料を売っているところを探し回りました。

最近はあるやらないから、置いてあるお店が少ないのです。やっと古い市場の中の小さな花屋さんで、オガラを見つけました。お盆は三日後に迫っています。ピカピカ光る紫のナスとトゲの痛いような新鮮なキュウリを買い、オガラの足をさして心を

込めて馬と牛を作りました。

お盆の最後の夜玄関でオガラを燃やし、二人はたちのぼる細い煙をじっと見ていました。ナスもキュウリも置いてあります。いつのまにかオバケのリクが姿をあらわし、二人のそばに浮いていました。

「リクちゃん、このナスやキュウリで作った馬や牛に乗ると、天国へいけるヨ」

「本当？ホントにコレに乗ればお母さん達に会えるの」

「ウン昔からの言い伝えでは、ご先祖様はそうやって帰って行くんだって。リクちゃんもやってごらんよ」

「お母さんに会えるなら、ボクやってみる」

オバケのリクはナスの牛にまたがりました。夕方の涼しい風が吹いて、あたりは青い闇につつまれました。その時リクの目の前に、細い銀色の道が天からサーッと地上に降ろされました。ナスの牛は命が

吹き込まれたように、銀の道を一步一步あゆんでいきます。

声も出せずに見送る二人の前で、ナスの牛はリクを乗せて着実に歩いて行きました。振り返ったリクはもうおかしなオバケではありません。あどけない、色白の6才の男の子でした。リクは二人に向けて小さく手を振りました。そしてそれはそれは嬉しそうにニッコリ笑うと、

「スウ、翔太、お母さん達が上で待ってる。ボクには見えるんだ、ボクもうすぐとどく。みんなでこっちを見て笑ってる、早くおいでって手を振ってる。アリガト、スウ。アリガト、翔太。元気でね。サヨナラ、タクサン遊べて面白かったよ。また会える日までガンバレヨ」

二人はリクの最後の言葉にプーッと吹き出しました。アイツ6才のくせに生意気だったよな、笑いながら二人とも泣いていました。嬉しくて、そして淋しかったのです。二人とも今では心の底からオバケの

リクが好きになっていました。

「オーイ、オレたちがジイチャンになっても忘れるなよー、ヒイバアチャン達によろしくなー。たくさん抱っこしてもらって、アマッタレルンダゾー元気でナー」

オバケに元気でなんて変ですよ、でも二人ともそんなことは全然気づかずに、リクに向かって叫んでいました。

「サヨーナラ、サヨーナラ、ボクの小っちゃんなおおじちゃん！」